

# 『三国遺事』に現れる夢

## ——その(2)——

曹 述 燮

### On the Tales of Dreams in SAMGUKYUSA ——Part II——

JO, Sulseob

『三国遺事』に現れる夢——その(1)では、『三国遺事』に載っている“夢”をストーリー展開のモチーフにしている三十の説話を取りあげ、作品中に描写された夢の持っている性質の一端を単純類型化することで、1, 他界との交通場(1): 神・霊, 2, 他界との交通場(2): 仏教の神々, 3, 現夢, 4, 胎夢, 5, その他の五つの項目に分類した。それにより当時の人々が“夢”をどのように認識していたかに対する理解としたのである。

ここではその続きとして類型分類化された項目中での夢のあり方を分析且つ総合することで説話中に夢が用いられる所以をたずね、各作品理解の補完を図るものとする。

#### 1. 夢の超空間性

空間は物質界を成立させる基礎形式で人間の認識の基礎をなすものであり、物質界を生きる生身の人間が占有する空間は紛れもない人間界である。ところで人間は自己が存在する空間として可視的な人間界だけに満足しない。心を通して空間を無限に多様化させることから物理的に存在する人間界とは異なる次元の異空間を自己のものとし、様々な面において物理的に制約を受けている人間界での自己を解放できる手段とする。その時の異空間は天上界、地下界、水中界、時にはそれらが混然とする規定不可能な世界等々さまざまな形態でありえるが、いうまでもなく人間界から異空間への物理的移行は不可能である。

これに対して『三国遺事』での夢モチーフの説話では夢が通路となってこのような異空間への移行が可能になる——夢の超空間性——のである。個々の作品中の空間超越の様相は説話それぞれの展開と関連しているが、夢の超空間性が認められる典型となるものが類型分類中の「他界との交通場(1): 神・霊」「他界との交通場(2): 仏教の神々」の項目である。「他界との交通場(1): 神・霊」の項目中にあらわれる別世界は地上の人間界に相対して天上界、水中界、山中界、死霊界に分けてみることができ、「他界との交通場(2): 仏教の

神々」の項目中にあらわれる別世界は地上の人間界に相対して仏教の教理と関連する様々な世界に分けられるが、それぞれの空間は独自のものとしてだけ存在するのではなく夢が通路となって常に人間界と相関し緊密に連携しているのである。以下に「世界との交通場(1)：神・霊」の項目中の別世界を取りあげてその実を示してみよう。

### 1) 天上界

北扶余の王である解夫婁の宰相である阿蘭弗の夢に天帝が降り謂う、・・・(夢天帝降而謂曰・・・)(卷一「紀異」：「東扶余」)

父王と皇后がわたしを見て、「私たちの夕べの夢に、揃って皇天上帝にまみえたが謂う、・・・その言葉を終えて天に昇られた、・・・」(父王与皇后顧妾而語曰、爺嬢一昨夢中、同見皇天上帝、謂曰、・・・言訖升天、・・・)(卷二「紀異」：「駕洛国記」)

以上は天神がそれぞれ夢を通じて人間と交通する場面である。ここに描写された天神は天帝という人格体<sup>注1</sup>であらわれ、人々はその世界の様相を物理的に確認してはいないまでもその天帝の存在する空間として天上界を把握している。そして天帝により主宰されるその天上界の権威は天上界固有の権威として認められるだけでなく、それが人間界とかかわる時は人間界の権威を遥かに越えるものとして認識する。そのために卷一「紀異」：「東扶余」では、天の子孫によりその地に新たな国を建てようとする天帝の意向が本来その場に建てられていた国をよその地に退けさせており、卷二「紀異」：「駕洛国記」では、天の子孫にめあわそうとする天帝の意向が阿踰陀国の姫を遠く駕洛国の地まで赴かせている。人間界の物事の運びが天帝の意向乃至は天の秩序<sup>注2</sup>により行われるのである。

ところでこれらの説話における天上界と人間界との交通の様相であるが、いずれにおいても異空間の人格体みずからが人の夢路<sup>注3</sup>についている。天帝みずからが下降し人間界の特定人に臨み交通をした後また上昇するという一方通行の形態を保ち、普通弱者が強者を訪ねる人間界内部での力関係による往来のあり方とその様相を異にしている。これはことがたとえ夢の中であるとしても人間界の人間みずからが異空間の中に飛び込むことをしないあるいは飛び込むことが許されないことを意味し、当時人の認識する夢の一面を物語るものであろう。

### 2) 水中界

夜、夢に老人がいて、(良貝)公に謂う、「弓が上手な人を一人この島に留めておけば順風が得られよう」、・・・居陀は島にさびしく立っていると突然池から出てきた老人がいて謂う、「わたしは西海の海神である、・・・(夜夢有老人、謂公曰、善射一人、留此島中、可得便風、・・・居陀愁立島嶼、忽有老人、從池而出、謂曰、我是西海若、・・・)(卷二「紀異」：「真聖女大王・居陀知」)

以上は海神という人格体が老人の姿をして夢を通じて人間と交通する場面である。ここにおいても人々はその世界の様相を物理的に確認してはいないまでもその海神の存在する空間として水中界を把握している。そして海神により主宰されるその水中界は水中界固有の権威と独自の秩序が認められる。まず海神が自分の家族を年老いた狐の危難から助けてくれた居陀知の恩に報いるため彼にみずからの娘をめあわせているがその時その娘を一輪の花に変化させ居陀知の懐に入れさせている点、二頭の竜に命じ居陀知の舟を護衛させている点などは海神の権威として認められる。そして竜を使いものとしていることなどは人間界とは異なる水中界独自の秩序として認められよう。

ところでこの説話における水中界と人間界との交通の様相であるが、ここにおいても天上界の例と同じく異空間の人格体みずからが人の夢路についている。海神みずからが良貝公に臨み交通をするという一方通行の形態を保つ。これまたことがたとえ夢の中であるとしても人間界の人間みずからが異空間の中に飛び込むことをしないあるいは飛び込むことが許されないことを意味し、当時人の夢認識に立脚した表現であると思われる。

### 3) 山中界

夢に外貌がしなやかで美しく、珠や翡翠で髪を飾った一人の女の仙人が現れ(比丘尼の智慧を)慰めて謂う。「わたしは仙桃山の神母である。・・・(夢一女仙風儀約約。珠翠飾鬢。来慰曰。我是仙桃山神母也。・・・)(巻五「感通」：「仙桃聖母随喜伝事」)

以上は山神という人格体が女の仙人の姿をして夢を通じて人間と交通する場面である。ここにおいても人々はその世界の様相を物理的に確認してはいないまでもその山神の存在する空間として山中界を把握している。ところが山神により主宰される山中界は山中界固有の権威というのはほとんど認められない。というのもここに描かれる山神の存在は仏に信心深い人間界どこかの一人の金持ちの女性に相似し、お互いの存在が置き換えられてもストーリーの流れにはなんら差し支えないような存在になっているからである。

しかしこの説話においても山中界と人間界との交通の様相は今までの天上界、水中界の例と同じく山中界の人格体みずからが人の夢路についている。山神みずからが来て比丘尼の智慧に臨みみずからが仙桃山の神母であると名のりながら交通するのである。これまたことがたとえ夢の中であるとしても人間界の人間みずからが異空間の中に飛び込むことをしないあるいは飛び込むことが許されないという当時人の夢認識に立脚しているものであるといえ、また山神が人の夢路につく時の描写を「来る」と表現しているのはまさしく山神の存在が人間に類比した存在として認識されていたことを示すものであろう。

### 4) 死霊界

調露二年庚辰三月十五日辛酉の夜の太宗の夢に姿のはなはだ威猛な老人が現れて謂う。「わ

たしは脱解である。．．．（調露二年庚辰三月十五日辛酉夜、見夢於太宗、有老人貌甚威猛、曰、我是脱解也、．．．）（卷一「紀異」：「第四脱解王」）

以前、（新羅が）百済の兵士と黄山で戦う戦役で長春郎と罷郎とが陣中で死んだ。その後百済を討った時、太宗の夢に現れて謂う。．．．（初与百済兵戦於黄山之役、長春郎罷郎死於陣中、後討百済時、見夢於太宗、曰、．．．）（卷一「紀異」：「長春郎・罷郎」）

講演し終わるとその母は夢に現れて謂う。．．．（講畢、其母現於夢、曰、．．．）（卷五「孝善」：「真定孝善双美」）

ある日、（彼は）吐含山に登り一頭の熊を捕らえてから、山の下村に宿泊した。夢に熊が変じて鬼になり訴えて謂う。．．．（一日登吐含山、捕一熊、宿山下村、夢熊變為鬼、訟曰、．．．）（卷五「孝善」：「大城孝二世父母」）

始め材木を運搬する時、夢に老父が麻の靴・葛の靴を一足ずつくれた。（始輸材、夢老父遺麻葛屨各一）（卷五「感通」：「郁面婢念仏西昇」<sup>注3</sup> 2）

以上は死霊という人格体それぞれが夢を通じて人間と交通する場面である。ここにおいても人々はその世界の様相を物理的に確認してはいないまでも死霊たちの存在する空間として死霊界を把握している。そしてこれらの説話においても死霊界と人間界との交通の様相は前出の例と同じく死霊界の人格体みずからが人の夢路についている。前三者は直接現れるという文字が用いられており、後二者も熊が現れてきて訴え、老父が現れてきて麻の靴・葛の靴を一足ずつくれているのである。これまたことがたとえ夢の中であるとしても人間界の人間みずからが異空間の中に飛び込むことをしないあるいは飛び込むことが許されないという当時人の夢認識に立脚しているものであるといえよう。

今まで類型分類中の「他界との交通場（1）：神・霊」項目に見える別世界の描写を取りあげてきた。そこに見える別世界はいずれもその空間に存在する人格体の認識を通じて把握されるものであり、一貫して別世界が別世界独自の空間としてだけ存在するのではなく夢が通路となって常に人間界と連携していることであった。ところがそれらの異空間を超越するあり方は例外なく人間の夢の中に降る・現れる・来る・語る・くれるという形で別世界の人格者が特定人に臨んでおり、人間みずからが異空間に飛び込むことをしなく許されなかったのである。つまり睡眠中の人の魂の遊離——脱魂思想——による他界訪問などはみられなく、これにより他界の様子がどのようなものであるかはさだかに描きだされない。これは別世界

でその活動領域を持つ人格者の存在と人間界の人間とを峻別し、また別世界と人間界とをも峻別していたことを示すものであろう。

## 2. 夢の超時間性

空間とともに人間の認識の基礎をなすものとして時間が存在し、それは出来事の継起する秩序で、不可逆的方向をもち、前後に無限に続き、一切がそのうちにある。当然のことながら人間界を生きる生身の人間の時間は記憶によって保持される過去・知覚によって保持される現在・期待により保持される未来の三様態で連続的であるが、常に現在を生きる人間にとっての未来とは経験した過去、経験する現在に対してあくまでも将来に経験可能であるはずの未来でしか存在しえなく誰一人としてその時間から抜け出すことはできない。それは人間にとって個々の置かれたその時間から抜け出すということはそれ自体全面的に宇宙の秩序から抜けだし別の秩序、別の宇宙へ入ることを意味するもので、そのようなことは死を想定する以外ははじめから不可能なことだからである。

これに対して『三国遺事』での夢モチーフの説話では夢が通路となっていまだ知る術のない未来の出来事が兆候あるいは象徴の形で示されるのである。現実的には超越できない時間の制約が夢によって乗り越えられる——夢の超時間性——のである。個々の作品中の超越の様相は説話それぞれの展開と関連して多様性をみせているが、夢の超時間性が認められる典型となるものが類型分類中の「現夢」<sup>註4</sup>の項目である。それは現夢自体現夢たらしめる所以が夢の中でこの世の未来の出来事に対する兆候あるいは象徴を示すために存在する夢であるからである。

ところでこのような夢の超時間性が認められるにはストーリーの展開において以下のように不可避的構成要素を持つ。それは夢の予見性と夢の成就性であるが、夢の予見性とは作品内部で夢主が夢の中で自分の生きる現在より先の事象を聞か見るということ、夢の成就性とは作品内部で夢主が夢の中で聞いたか見たその事象が一定の時間が経過した現世で必ず現実化するということである。「現夢」項目に分類された作品から夢の予見性と成就性にかかわる描写は以下のようである。

卷一「紀異」：「太宗春秋公」では、文姫がまだ幼いころ姉の宝姫が見た夢を錦の着物を代価に払って買いとりその後太宗の王妃となっている。この時宝姫が見ている夢——西岳に登り尿をしたら京城一杯になった——はその夢主が未来に一國を経営する貴人になる事象で予見性に富んでいるものであり、そして代価を払って夢主からその夢を買った文姫は果たして王妃になっていることでその夢は現実化している。このような夢の成就性は、「文姫が太子法敏、角干仁問、角干文王、角干老且、角干智鏡、角干愷元等の母となるが、これは当時夢を買った徴候がここに現れたものである（太子法敏、角干仁問、角干文王、角干老且、角干

智鏡，角干愷元等皆文姬之所出也。當時買夢之徵，現於此矣)」とする記述にあらわである。

巻二「紀異」：「元聖大王」では，新羅第三十七代の宣徳王が崩御した後，国の人々が上宰である金周元を奉り王にしようとしたにもかかわらず第二番目の宰相の座についていた元聖王が先に宮廷に入り位に就いている。これは元聖王が以前自分の見た夢——幘頭を脱ぎ，白い笠を被り，十二弦の琴を持ち，天官寺の井戸の中に入る——が夢主が国王になることを示す事象で予見性に富んでいるものであり，その夢を見た元聖王は果たして王位に就いていることでその夢は現実化している。この作品においても夢の成就性は，「このような出来事の生じる所以は，元聖王が阿殮の余三から自分の見た夢を解いてもらい，当時元聖王より上の座にいる周元に先だって王位に就くためには密かに北川の神に祭りをすれば良いという余三の助言に従ったためである。そしてこれは元聖王の見た吉夢が当たったものである（王曰。上有周元。何居上位。阿殮曰。請密祀北川神可矣。従之。未幾宣徳王崩。国人欲奉周元為王。將迎入宮。家在川北。忽川漲不得渡。王先入宮即位。上宰之徒衆。皆來附之。拜賀新登之主。是為元聖大王。諱敬信。金武。蓋厚夢之応也）」とする記述にあらわである。

巻三「塔像」：「黄竜寺九層塔」では，新羅の黄竜寺に塔を建立するようになった百済からの工匠阿非知が初めて塔の柱を立てる日に本国の百済が滅亡するという予見性に富んでいる夢をみて心密かに塔の建立をやめるべきかとためらう。しかし突然大地が振動し薄暗い中で一人の老僧と一人の壮士が金殿門から出てその柱を立ててから隠れて見えなくなったために工匠は後悔しその塔を建立し終える。しかし塔の建立後には果たして高句麗と百済が新羅により滅亡されることでその夢は現実化しており，そのような夢の成就性は，「塔をたてた後は天地が安泰になり新羅・高句麗・百済の三国も統一されている。これは建てられた塔のお陰である（樹塔之後。天地開泰。三韓為一。豈非塔之靈蔭乎）」とする記述にあらわである。

巻四「義解」：「義湘伝教」では，中国の終南山の至相寺の高僧智儼が，ある夜——一株の大きな樹木が海東に生じてその枝葉の陰が中国にまで及び，上には鳳凰の巢があつて登って見ると一個の摩尼宝珠があつて遠くまで光り輝いている——という予見性に富んでいる夢を見る。目が覚めてはその夢を神秘に思い掃除をして待っていたところ，果たして海東人である義湘が至ることでその夢は現実化している。この作品においても夢の成就性は，「彼は特別な礼遇で義湘を迎えいれ，自分の昨日の夢は義湘が来てたよる兆しであったと言い入室を許した（殊礼迎際。従容謂曰。吾昨者之夢。子來投我之兆。許為入室）」とする記述にあらわである。

今まで類型分類中の「現夢」項目に見える夢の超時間性が認められるために不可避的構成

要素であった夢の予見性と夢の成就性に関する描写を取りあげてきた。それらの作品には予見される内容が小さくは人々の出会いの事象から大きくは個人の将来、一国の将来の事象に至るまで、近くは翌日の事象から遠くは何十年先の事象に至るまでの多岐に渡っている。にもかかわらずそのいずれの内容を扱ってしようとも構成はまず現段階からして未来の事象が夢に見られるという部分を持ち、その後見られた未来の事象がストーリーの内部で必ずや現実化するという部分を持ち一貫性を帯びる。そしてある条は全ストーリーが夢の見られた予見性とその成就性を証すためだけに存在するかに感じさせられる。これは当時人が夢を通路にしていまだ知る余地のない未来の出来事を予見することにより現実的には超越できない時間の制約を乗り越えていたことを物語ると同時に、現実化した出来事に神秘性を付加していたことを知る。

以上で見てきた夢の超空間性・超時間性からすれば、現実界では一定の空間・時間の最中にだけ存在しえる人間が人間界外の別世界と交通したり、あるいは現時以後の未来の事象を見たりすることを夢で可能にしている。この点において夢はあくまでもの時空間の現実的な制約に縛られて生きる人間にとって時空を超越して生きたい願望を少なからずかなえてくれる理想そのもので、人間性に対する超人間性の一面として現実とは相互表裏をなすものであると理解できる。

注1. ここでは人間界の物質的な人間ではないもので主体性をもつ神・霊などを称する。

注2. 天は時に雑霊が住みつく場所でもある。卷二「紀異」：「真聖女大王・居陀知」では年老いた狐の精霊が天に住処をおいている。

居陀は島にさびしく立っていると突然池から出てきた老人がいて、「わたしは西海の海神である。いつも一人のお坊さんが日の出の時に天から降り陀羅尼経を暗誦しながらこの池を三回廻るたびごとに我が夫婦と子孫はみな水上に浮く。その坊さんは我が子孫の肝臓を取って食い尽くす。……（居陀愁立島嶼。忽有老人。從池而出。謂曰。「我是西海若。每一沙彌。日出之時。從天而降。誦陀羅尼。三繞此池。我之夫婦子孫皆浮水上。沙彌取吾子孫肝臟。食之尽矣。……）」

注3. 『三国遺事』に現れる夢——その(1)の論においてのこの条の説話は、「死者の霊との交わり」の項目ではない「その他」の項目に分類していたものである。しかしこの条の説話における老父の存在は“死んだ貴珍の霊”と解釈して無理がないことを同論で論じてきたがためにここでは「死者の霊との交わり」の一項目として扱っている。

注4. 現夢の性質の詳細は『三国遺事』に現れる夢——その(1)の論に譲る。